上智大学カトリックセンター
〒102-8554
東京都千代田区紀尾井町7－1
TEL: 03-3238-4161

イエズス会日本再来日100周年記念
イエズス会第30代総長就任記念

アドルフォ・ニコラス神父　講演記録

2008年12月22日（月）

上智大学10号館講堂

本稿は、イエズス会日本再渡来100周年および第30代総長就任を記念して、2008年12月22日、上智大学10号館講堂において、本学の学生たちに向けて日本語で語られた講演の骨子である。

ニコラス先生の紹介（カトリックセンター長）

今日の講演会のチラシに「おかえりなさい！ アドルフォ・ニコラス先生」と書いてありますが、先生という表現では足りない、十分に表現し切れない気がします。先生は神父、つまり、カトリックの司祭、神学者として、貧しい人々、殊に、東京に住む移住者たちのために尽くした人です。

ニコラス神父は、フランシスコ・ザビエルの後を継いで、日本という、キリスト教とは馴染みの薄い異文化の地に、宣教師として来られ、神学者として、日本人にキリスト教のメッセージをどのように伝えるべきかと日夜奮闘なさり、イエズス会日本管区を統率する管区長を務められました。その後、東京で生活する在日外国人や多くの貧しい移住者の世話をし、彼らの抱えるさまざまな問題に取り組むカトリック東京国際センター（CTIC）で働かれました。さらに、日本を離れてフィリピンのマニラに住み、東ティモールやビルマなどの地域を含む東アジアとオセアニア全体のイエズス会統治の任務に就いておられました。東京では、石神井キャンパスのある練馬区のイエズス会神学院に住んでおられた時期もありましたが、管区長になってからは足立区にアパートを借り、普通の人々の生活を共有しようと努めてこられました。日本に宣教師としてやってきたイエズス会員の中でイエズス会の総長に選ばれたのは、第28代総長ペトロ・アルペ神父に次いで2人目です。日本という非キリスト教国での生活や活動が、全世界のイエズス会にとっても、非常に貴重な掛け替えのない経験である、と言えるでしょう。

選ばれたばかりの総長として日本のイエズス会員宛に送られた手紙の中で、「今日私があるのは日本のおかげです。ご存じのとおり、人間であるとはどういうことかについて、成長について、沈黙について、宗教性について、探求と神秘について私が持っていた考えを改めるよう助けられたのは日本においてでした。日本がなければ自分は大分違った人間になっていたことでしょう。」とお書きになっておられます。“おかえりなさい！”という言葉とともに、今日ここで改めてお迎えいたしましょう。それでは、ニコラス神父様、ご講演、よろしくお願いいたします。

第30代イエズス会総長

アドルフォ・ニコラス

上智大学と私

皆さん、こんにちは。今日は、懐かしい上智大学を再び訪問できて、感慨無量です。私の人生において上智大学は特別な位置を占めるからです。

私が初めて日本の土を踏んだのは、1961年です。まず日本語を学んだ後、1964年から68年にかけて上智大学の神学部で学びました。私は、上智大学の卒業生でもあるわけです。

神学部では真剣に勉強しました。よく勉強した私は、時には先生方をせめるほど、厳しい神学生でした。その頃はいろいろなことが変わる過渡期で、先生方が私たちに質問なさるばかりでなく、私たちも先生方に向かって厳しい質問を投げ掛けたものです。私も先生方を困らせた一人だったように思います。

あの頃、神学部は上石神井にあって四谷に来る機会はあまりなく、自由時間が取れる木曜日には早稲田大学や立教大学のスペイン語クラブに顔を出したこともありました。“日本という国はどういう国だろう？”という問いが重要な時期でした。大学生たちの振る舞いを見てびっくりしたことも少なくありません。人間関係とか、クラブ活動とか、言葉遣いとか、なかでも、一番驚いたのは、お酒の“飲み方”でした。当り前と言えば当り前ですが、私の母国スペインの“飲み方”とは違っていて、びっくりしたこともあります。一人の学生が私を酔っぱらわせようとしましたが、うまくいかなかったので、がっかりしたそうです。私はそれほど飲むほうではありませんでしたので、おそらく“飲み方”が違っていたからだろうと思います。

その頃の上智大学の生活は楽しい記憶で一杯です。無論、今もそうでしょうが、面白くない講義もありました。でも、ほとんどの思い出はとても楽しくて大変いい時代でした。

西洋人と日本人との違いもだんだん分かってきました。西洋人は割合に批判的で、何か気に入らなければ口にしますが、日本人は黙っていて何も言わない。

授業に出席し傍から眺めながら、“違う”な、と思いました。1968年に卒業してローマに行ったときも、急に大学紛争が起こって、また、驚きました。“違い”が深いな、という感じです。日本人学生の“心の中にある動き”など、私には分からないことがたくさんありましたが、グループ内の調和を壊さないようにする努力にも触れさせてもらいました。

ローマで勉強した後、今度は教員として上智大学の神学部に返ってきました。それからおよそ25年間、いろいろなことを経験しながら、教えました。私にとって、先生としての経験は、また全然“違う”経験でした。私は厳しい学生でしたので“先生（の立場）になる”のがとても怖かったです。私がかつて先生方に対してしたのと同じように、学生が私をせめてくるのではないかと思い込んで、それはもう、勉強しました。その結果、難しい先生になりました。勉強し過ぎて、厳しくなって、神学生たちに過度な要求を突き付けたかも知れません。

そのうち、時代のムードも変わり、神学生たちにも余裕があったのでしょう、“先生、何で、あんなに厳しくしているの？”といった感じです。一時的でしたが、“あだ名”もありました、「鬼のニコラス」。イエズス会には言わないでくださいね、使うと困るから。

なかでも楽しい思い出と言えば、神学部以外の先生方と一緒に、四谷キャンパスで、「現代の神学」をテーマに、学際的なセミナー（学内共同研究会）を開いたことです。とても勉強になりました。当時有名な幾人かの先生方とご一緒でき、まさに“上智大学のよさ”を味わったと実感したものです。

ところで、私が担当したのは神学の科目でしたから恐らく少ないでしょうが、もしかして、皆さんの中に、お父さまあるいはお母さまが上智大学の卒業生でいらっしゃる方があれば、私の授業に出たことのある方がおられるかも知れませんね。

上智大学は、訪れる度に新しい建物を目にします。周りの風景も変わってきました。今回もそう感じます。それでも、やはり、私にとって、かつて学びそして教えた懐かしい場所であることに変わりはありません。思えば、この10号館講堂での話も初めてではありません。教員として講義をした懐かしい場所の一つです。先ほどイエズス会総長というご紹介をいただきましたが、今、私

が一番自慢したいのは、やはり皆さんと同じように、そちらの席に座ってここで学んだこと、この壇上に立ってここで教えたことです。

今日の話の要点

今日の私の話は３つの要点から成っています。第１の要点は「上智大学は、どういう大学か」についてです。第２の要点は「世界の現状、特に、若者たちの現状から得られる幾つかの示唆」についてです。第３の要点は「今の世界の中で、上智大学の学生に望むこと」についてです。

上智大学はイエズス会大学の一つ

第１の要点です。上智大学とはどういう大学なのでしょう。ローマにいる私の視点という意味で、限られた視野からの見方に過ぎませんが、まず、上智大学は、世界中にあるイエズス会大学の一つ、イエズス会が設立母体となっている大学です。

ここで、世界におけるイエズス会の教育活動の現状について少し触れておきましょう。日本における固有の使命と働きを担っている上智大学は、また同時に、世界のイエズス会大学の一つでもあります。イエズス会が設立母体となっている高等教育機関（大学あるいはそれに相当する教育機関）は、現在、世界中に227校、あります。厳密な意味での大学は80校前後、その学生総数は64万人を超えています。上智大学の学生数は、全学部でおよそ１万人、大学院を併せるとおよそ１万２千人ですか。つまり、上智大学の学生さんの数は、世界のイエズス会大学の総学生数の2%弱ということになります。

また、イエズス会大学は、あらゆる大陸、多くの国々、異なる状況の中に存在しており、そこで学ぶ学生とそこで働く教職員の国籍、人種は、まさに、世界の縮図です。富める国にも貧しい国にも、平和な国にも争いが絶えない国にも、イエズス会の大学は存在しています。上智大学は創立当初から「国際性」を特徴としてきましたが、それはまさに、世界中にあるイエズス会大学としての特徴の一つに他なりません。上智大学で学ぶ皆さんには、世界中のさまざまな国のイエズス会大学の学生とつながっていることを、今一度、意識してほしいのです。

私たちは、今、ネットワーク時代に生きています。ローマではたくさんの国際会議が開かれ、イエズス会関係のものも少なくありません。そのような状況でよく耳にする言葉は、やはり「ネットワーク」ですね。孤立した一組織ではほとんど何にもできない時代になりました。会議の結論は、しばしば、「これからは、教育関係の『ネットワーク』とか、社会問題関係の『ネットワーク』とか、エコロジー関係の『ネットワーク』とかが必要だ。」ということになります。あらゆるレベルで、そのような「ネットワーク」の中で働いたほうが影響範囲も広く有意義だ、と受け止められています。

今年から、アジア地域のイエズス会の取り組みとして、アジアにあるイエズス会の４つの大学による交流が始められた、と聞いています。韓国の西江大学、台湾の花連大学、フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学、そして日本の上智大学から学生たちが集まって交流を深め、イエズス会大学で学ぶ学生としてアジアや世界の未来を一緒に考えようという企画で、参加した学生たちも引率者たちも皆とても喜んだ、と聞きました。今後とも、交流を深め、グローバルな視野を育み、世界に貢献できる人材に育っていってもらいたい、と心から願います。

上智大学はカトリック大学

また、日本の歴史を紐解いて見えてくるのは、この大学はやはりカトリック大学であるという事実です。上智大学がグローバルな視野を持つ人材育成を目指す理由の一つは、カトリック大学だからです。“カトリック”という語は“普遍”を意味します。カトリック大学は、もちろんのこと、学生や教職員にカトリック信仰を推し付けません。そうではなく、人類共同体に共有され得る“普遍的な価値”の追求・実現を目指します。

今年の１月、図らずもイエズス会総長に選ばれた私は、現教皇ベネディクト16世のところへご挨拶に伺いました。そのとき、上智大学の話を切り出されたのは教皇様でした。座ってすぐその話が出ました。行く前に何を着て行こうか、とちょっぴり心配していた私は、スータンでなくていい、と言われたこと

もあり、日本でもらったこの日本製のスーツを着て出掛けました。腰を掛け、どういう話になるだろう、どちらから話をするのだろう、と思っていた矢先、すぐ、日本の話、そして、上智大学の話が出たわけです。教皇様は、日本でのイエズス会の働きの中で上智大学が最も大切なものの一つである、と考え、そうおっしゃったわけです。35年以上日本にいた私の主な働き場所が上智大学であることをご存知だったのでしょう、教皇様は、日本文化との対話、日本の若者の福音との出会い、若者の養成の大切さを強調しながら、上智大学の存在意義と重要性を語られました。

教皇様の発言は、2つの意味で、象徴的（symbolic）でした。

一つには、その発言が、ザビエルにまで遡る上智大学の起源を思い起こさせる、という意味で象徴的でした。アジアで福音宣教したザビエルは、日本と日本人にとても感銘を受け、自分が体験したパリ大学のような高等教育機関、つまり大学を、日本の都に創りたい、と考えました。西洋以外にも高度に発達した文明があることを知り、東洋と西洋の叡智（＝ソフィア）の出会いと交わりが日本やアジアの福音宣教において不可欠だと考えるようになったのです。

ザビエルの夢は、16世紀末～17世紀初めのキリシタン時代、一旦は、コレジヨやセミナリヨという形で実現します。これらの学校では、西洋の学問ばかりでなく、日本語の授業や日本文化を学ぶ授業もありました。そこで教育を受けた日本人はたくさんいます。彼らは、ラテン語や天文学だけではなく、日本文学や茶道など、日本文化も学んだのです。

今（2008）年11月24日に長崎で列福された中浦ジュリアンなどはこのような学校の卒業生の代表人物と言えるでしょう。中浦ジュリアンは、その名を日本史で聞いたことのある方も少なくないでしょうが、天正遣欧使節でヨーロッパに送られた少年4人の中の一人です。彼らは、ローマで教皇と王侯貴族に会い、当時のヨーロッパ文化を目のあたりにして、驚きます。帰国後はイエズス会に入り、コレジヨやセミナリヨで勉強して、司祭を目指しました。中浦ジュリアンは初めてローマを見た日本人でありながら、迫害下の日本に潜伏して布教活動を行い、ついには殉教に至ります。彼は西洋の文明に触れながらも、日本人司祭として日本の地で働きます。彼の中では、キリスト教信仰と日本人

であることとは決して矛盾しませんでした。日本人キリシタンとして、生き、死んでいったのです。洋の東西を問わず、真理を真理として証しし続け、そのためには死をも潔く迎える生き方を示した彼の人生と殉教には、東洋と西洋の出会いと統合を見ることができます。キリシタン時代のコレジヨやセミナリヨは上智大学の前身、列福されたペトロ岐部や中浦ジュリアンは上智大学の精神的な先輩、と言えるでしょう。

もう一つには、同じ発言が、上智大学がローマ教皇の思いによって建てられた大学であることを再確認させる、という意味で象徴的です。今年、西暦2008年10月18日は、イエズス会が日本に再渡来して100周年目に当たります。明治時代後半、カトリックの高等教育機関の設立が望まれるようになったとき、時の教皇ピオ10世がその計画を実行に移しました。実際には、イエズス会にその設立を委託するわけですが、上智大学はイエズス会の思いだけで建てられたのではありません。まさに当時のカトリック教会全体の願いによって創られた大学なのです。創られた後も世界各地のカトリック教会からの援助と支えをいただきながら、今日に至っています。特に第二次世界大戦後、多くの国から宣教師が送られてきました。私もその一人です。ですから、現在の教皇様が上智大学を気にかけ、上智大学に思いを致されるのも当然でしょう。上智大学やその卒業生には、特別の期待が掛けられている、とも言えます。

貧しさから学ぶ人間性

第2の要点は、世界の現状から、皆さんに考えていただきたいことがあります。上智大学の卒業生が働きを求められる現場、現実とはどういうところなのでしょうか。上智大学の教育目標に使われているフレーズに、Men and Women for Others という表現があります。「他者のための人」ということです。その others（他者）とは誰のことなのでしょう。私たちは誰の隣人になろうとしているのでしょう。

私の体験をお話しします。私は、マニラに派遣される前に、カトリック東京国際センター（CTIC：Catholic Tokyo International Center）で、4年間、働きました。助けを求めている人、虐げられている人はどこにでもいます。そ

の中で、もっとも助けを必要としている人として、在日外国人が挙げられます。先週見たバチカンの或る新聞記事の中で、全世界の移住・移動者が２億人に達した、と報じられていました。200,000,000 人です。

目黒にあるこの国際センター CTIC（通称シーティック）で働いた４年間は、難しく厳しい、けれど同時に、大変喜びの多い期間でした。厳しい、と言ったのは、やはり在日外国人の状況がものすごく厳しかったからです。日本においてだけでなく、世界的にも、そして今はもっと、そうです。私がローマで勉強していたとき、ローマにいたフィリピン人は１万人でしたが、今は８万人。イタリア全体なら、多分、20 万人ぐらいになるでしょう。イタリアだけではなくて、ヨーロッパ全体、アメリカ、それから、サウジアラビア、日本、韓国、台湾。やはり仕事のあるところ、少なくとも最近の金融危機が勃発する前までは仕事のあったところですね。

その人たちはとても厳しい状態に置かれています。そのような目に遭っていると、やはり辛い。普通の生活が出来ている私たちには想像しにくいことですが、すべてが難しくなります。スーパーの買い物から子供の教育まで、全部、難しくなる。誰と話せばいいか、どこへ行けばいいか、どの事務所でどういう書類をもらえばいいか、全部が難しくなります。病気でもするとそれこそ大変、すべてが崩れてしまう。

それでも、同時に、大変喜びの多い時でもありました。

２カ月前にブラジルのアマゾンを訪ねたのですが、そこには、もっともっと貧しい人がいて、その人たちの中に住んでいるコミュニティがあります。そのようなところに住み、そこの人々と働いているシスターたちや神父たちに会って話すと、彼らがどれほど喜びとエネルギーに溢れているか、体験させてもらって、感激します。なぜでしょう。貧しい人と働くとき、どうしてそんなに大きな喜びがあるかと言えば、彼らが人間世界の“淵”にいるからです。ぎりぎりのところにいる彼らには、苦しみとは何かが、人のニーズが、よく分かります。物が不足することの大変さが、不安や恐れの中で生きる辛さが身に沁みます。ですから、他の人がそれを体験するとき、よく分かるのでしょう。綺麗事なんかで解決できるなどとは決して思わず、自然に、すぐ、気持ちが通じ合います。

人間世界の“淵”にいてこそ「人間的に存在し」ている、そんな気すらします。物が溢れ、何でもある私たちの世界では「人間」が見えなくなってしまう。飾り（デコレーション）が多くて、本当の姿が隠れてしまう。雑音が多くて、本当の声が、本音が聞こえない。でも、その人たちの中では「人間」が、「人間そのもの」が一番先に見えるのです。自分が恥ずかしくなるような、何か深みのある愛情や同情、他人に対する憐れみや思いやりに出会わせてもらった４年間、とても、“楽しみ”ではなく“喜び”の多い４年間でした。

私は、いろいろなボランティアの活動団体と接します。そこに来る人、集まる人は、クリスチャンもそうでない方もいますが、とにかく、いい人ばかり。でも、時折、私は、何か物足りなさを感じます。“全部は捧げない。95％まで行くのですが、最後の５％は、やはり、自分の安全とか自分のしたいこととか、他の目的があって、95％までしか行かない。”と一人の日本人の若者が寂しそうに言っていたのを思い出します。

在日外国人（難民、移住者、移動者）たちのように、本当に困っている人たちと働くと、彼らが 95％ではなく 105％まで行くのを目のあたりにして、驚きます。彼らは、なけなしの状態から、分け与えます。彼らは“淵”に置かれ、いつもぎりぎりのところで生きているからこそ、すべてを懸けて助け合える、ということでしょうか。そんな中で、私は「人間性（human nature／humanity）」を学んだ気がします。

一番健康な若者たち

平和部隊（Peace Corps）や青年海外協力隊などのボランティア活動に加わり、海外で２年間ほど働いて、戻ってきた日本の若者 50 人ぐらいを集めた、ＮＨＫのインタビュー番組を見て感動した記憶があります。インドやアフリカ、いろいろなところに行って働いてきた若者たちです。彼らはとても正直で、綺麗事を言って自分を隠そうとはしません。大方の人が、単なる好奇心でとか、日本の生活に飽きて別な生活を知りたかったのでとか、特段深い理由もなく行ったらしいのですが、“でも、行った先の現地で人と接触しながら自分は変わりました。”と語っていました。“人間にとって、何かを持っていることよ

りも、生きていることのほうが、遥かに重要なことだとか、そのためならどんな犠牲をも厭わずに働くほど、家族というものは貴重なものだとか、感じさせられたことを通して、自分は変わった。日本に戻ってきて、今、そこでもらったエネルギーをどうすれば活かせるかが見えなくて、寂しい。”というような思いを口にする人もいました。そのような若者たちの中からイエズス会への入会希望者が出たらいいな、と思ったものです。

日本社会の中で一番健康な人たちが見えた、そんな気がします。当り前の生活から出て、習う、そして、そこで自分の心が変わる。何と健やかで美しい人間の姿でしょう。

同様のことは他所にもあります。今回、日本に来る前に、ローマにあるイエズス会難民サービス（JRS：Jesuit Refugee Service）で難民たちと働く人々にお会いしました。よく似た例を幾つも耳にしました。例えば、ニュージーランド、アメリカ、ベルギー、ドイツ、スペインなど、いろいろな国から、若いプロフェッショナルが、アフリカや南米に出掛け、自分の人生の２年間をそこでの奉仕に捧げます。２年間の奉仕から戻ってきた彼らの多くは、“立派なことをしてきた。”と自負するどころか、かえって、自分の小ささを痛感し、“むこうで、どれほど立派な人に出会わせてもらったか。”と感謝します。

一人のオーストラリア人、若い女性の話です。彼女は、アフリカへ行き、２年間、難民たちと働いた後、勉強して、国連の難民高等弁務官（High Commissioner for Refugees）になりました。トップ・ポジションまで行った彼女は、“一番勉強になったのは、何と言っても、難民の人たちと同じレベルで働いたあの２年間。彼らに習った心、彼らから学んだ価値観は、今でも、私の人生の導き。”と言いました。

もう一人は、若いイタリアの男性です。アンゴラでのボランティア活動後、研究生活に戻り、政治学（political science）を修めた彼も、“すべての勉強よりも、アンゴラでの、あの２年間のほうが、私の人生の為になった。”と言っています。

このようなケースはとても多く、教育課程を工夫する上でも大切な示唆を含んでいます。

上智大生に望むこと

それでは、上智大学の学生に何を望みましょうか。これが今日の第３の要点です。

上智大学は、日本社会においてばかりでなく、世界中のカトリック教会やイエズス会大学からも、いろいろな意味で注目され、期待されています。私は、自信を持って、そう言えます。日本から出て、フィリピンに、ヨーロッパに、いろいろなところに行って、さまざまな人に会う私は、必ず、“あなたは日本から来ましたね。その日本は、世界にどういう貢献をするのですか。”と訊かれます。世界への貢献と言っても、ロボットのことではありません。考えているのは、平和と正義、人間性に関わる貢献です。

ご存知のように、3、40 年前から、西洋は、種々の文化的な危機に見舞われ、その結果、幾つもの文化が、現在、過渡期にあります。どちらのほうへ進んで行けばいいのか、分からないのです。ヨーロッパ文化、特に、宗教がそうです。伝統的な宗教がほとんど見えなくなっていく中で、若い人たちは何を求めて生きていけばいいのか、迷っているのかも知れません。そこで、“知恵はどこから？”となれば、“知恵は東から！”ということで、東を見ます。日本は期待されています。“日本から何が来るのか。”と訊かれます。

上智大学はよく知られています。先ほども申し上げたように、上智大学が出来たのは、日本のイエズス会だけでなくカトリック教会全体の望みに拠っており、また、国際的な援助や支えのお陰でもあります。関心の高さが窺えます。皆、当り前のように、上智大学がどのような貢献をしてくれるのか、と尋ねます。その貢献、世界への貢献に、あなた方、上智大生が関わっているのです。

21 世紀になり、時代はますます混迷の度合いを深め、真理とは何か、生きるとは何か、多くの人がその答えを探しています。この問題は日本でも感じられます。年間３万人もの方が自ら命を落とす現実が日本にもあります。ザビエルの願いの上に建てられた上智大学は、英語で、Sophia University と呼ばれます。「叡智」すなわち「極上の知恵」を意味するギリシャ語「ソフィア」。その校名にふさわしく、現代世界においてその使命を果たしていくよう、私たち、上智大学に関係する一人ひとりが、問われ、求められています。

最近、ローマで、また、ヨーロッパで、よく話題にされること、私が頻繁に耳にする質問の一つは、教育機関の「アイデンティティ」に関するものです。上智大学も教育機関の一つですから、“上智大学の「固有の特徴」、その「存在意義」は何か。”ということになります。東京に在る、という特徴なら、他にも当てはまる大学が幾つもあります。上智だからこそ、と言える「固有の特徴」、「アイデンティティ」はどこにあるのでしょうか。

「アイデンティティ」は、何に「関心」を向けているか、によく現れます。上智大学は、今、どういう問題を、自分の「チャレンジ」とし、自分の「関心」としているのでしょうか。その点について、私たちは、正直に見直し、率直に話し合わなければならないでしょう。

このことは、私が総長に選ばれたイエズス会第35回総会でもテーマになり、イエズス会の「アイデンティティ」や「チャレンジ」に関するいろいろな文章も出されましたが、どんな「関心」であっても、それはまずもって“人類”の「関心」でなければおかしい、と私は思っています。何でも出来るわけではない私たちが自分の使命（mission）を具体的に定義しようとすればするほど、多分、その対象や範囲などを絞り込むことが必要になるでしょう。でも、“人類”の「関心」が“私たち”の「関心」でもある、という点が明確でないと、狭隘な考えに陥って、根本的な間違いを犯し兼ねません。

今の世界の「関心」は、はっきりしています。貧困と飢餓、暴力や失業、不安や恐れの中で生きていかなくてはならない現実など、端的に言えば、人間が人間として尊重されず、物と同じように扱われるようになっていくこの時代の在り方が、私たちの「関心」です。

21世紀に入っても、依然として夥しい数の人が食べられない、という事実は、人類の恥です。そのことを、私自身、とても恥ずかく感じます。21世紀を迎えた私たち人類は、お月様まで行けるほど進歩し、さまざまなことが出来るようになったのに、まだ、食べ物が無くて飢えている子供がたくさんいます。自分の国では食べられないので、他の国に行かなければならない人々が大勢います。すべてを捨て、命懸けで、祖国を後にしたのに、途中で息絶える人も少なくありません。これは、私たち人類の恥であり、私たちの第一の「関心」でなくて何でしょう。

人にはそれぞれ、いろいろな種類や分野の、その人らしい独自の呼びかけがあるでしょうが、このことは否定できません。どんな専門分野の博士になっても、依然として「人として、私は、何のために生きるのか。」という問いは消えません。それは“この世界の現実の中から”たえず私たちに問いかけます。教育の質が試される場がそこにもあります。“この世界の中に、私たちは、人として、存在している。”ということが大前提です。

また、先ほど申し上げたように、私たちは、今、ネットワークの時代の中に生きており、一つのグループ、一つの組織、一つの施設ですべてに応えることは無理です。他方、ネットワークを活用することにより、世界的に働ける可能性があるのも事実です。ですから、この可能性も前提にしながら、あなたがた、上智大生の皆さんに期待することを申し述べます。

4つのチャレンジ

私は、現代世界の諸問題を、大きく4つに括り、4つの大きなチャレンジ、と捉えています。

第1は、「貧困の問題」に関わる「社会的なチャレンジ」です。昔からあるこの問題は、現代、特に、厳しくなりました。コミュニケーションが進んだ現代では、知らずに済ますこと、問題があることを否定することは難しくなる一方です。どういうふうにしたら、それに応えられるか、と考えざるを得なくなります。ローマを発つ前に見た新聞記事に、イタリアだけで、今、200万家族が貧困状態にある、とありました。日本にもきっとそういう家族がいるでしょう。貧困の“ポケット”とか“小グループ”とか、綺麗な言い方で、問題の深刻さを隠そうとする人がいるかも知れませんが、世界各国が挙って「社会的な契約」を交わし合って取り組むべき大問題です。2000年9月の国連ミレニアム・サミットで採択された「ミレニアム開発目標（MDGs：Millennium Development Goals）」の中の“2015年までに世界の貧困を半減！”という目標も、すでに遅れています。遅れているばかりでなく、問題が増えてきています。これが、私たちに貢献が求められる重大な分野の一つです。

第２は、「環境の問題」に関わる「エコロジカルなチャレンジ」です。日本の文化に深く浸透している大自然は世界的に破壊されつつあり、誰もが、“自分は無関係だ。”と言って済ますことはできない、と感じるようになってきました。エコロジーは、特定の限られた人たちの事、夢中になって働いている人たちの事、ではなくなりつつあります。私たち皆の事、なのです。存在そのものが危ぶまれる国があります。生きていくための水が無い国があるのです。エコロジーの問題は、「大自然との契約」の問題と言えるほど、大きな問題です。

第３は、「教育の問題」に関わる「文化的なチャレンジ」です。どうすれば世界中の子供たちに教育を与えられるか、という問題です。実際、教育がなければ、子供の将来もありません。

第４、最後は、「人間性そのものの問題」に関わる「倫理的なチャレンジ」です。行為の善悪の問題ばかりでなく、生き方そのものの問題としての倫理です。倫理的に生きてこそ、人は人となります。人間が、人間を、物としてではなく、もう一度、人間として受け止め直し処遇し直すこと、つまり、「倫理的に生きる」ことこそが、意味ある生活を可能にし、人生を生きるに値するものとします。私たち人間は、物やお金に振り回されない人間らしい自由と、温かく誠実な人間関係に由来する人間らしい喜びを大切にする生き方を、何度も何度も、取り戻すよう努力しなければなりません。

すべては他者のために！

さて、このような文脈で、あなたがたに、何を、期待できるでしょうか。第1、第2、第３のチャレンジについて言えば、一言で言うなら、現実を知ること、現実を体験することです。まず、自分が生きている世界の現実を知ってください。そして、体験してください。特に、今も、人間の尊厳を脅かす現実があることを知ってください。今では、インターネット上に情報が溢れていて、アクセスすれば、いろいろな情報に触れることができます。どこで紛争があり、どこに貧困があるのか、記事や映像を、場合によっては動画さえ、見ることができます。でも、それだけでは、知ったことにも、体験したことにも、なりません。貧困について知ることと、「貧困を知る」ことは、別のことなのです。いくら

情報として貧困について知っていても、それは「貧困を知る」ことにはなりません。

貧困というのは、一日２ドル以下で暮らす状態であり、世界中の何％の人々がそういう状態なのか、という知識は必要です。でも、貧困の本当の問題は、その貧困に伴う「人間の尊厳」の破壊であり、「未来の可能性」の搾取です。さらに、それに伴う人々の悲しみや絶望であり、惨めさです。そういう状態に追い込まれている人々へのコンパッション（compassion：共に感じ、同じように感じること）がすごく大事です。仏教もキリスト教も、どの宗教も、コンパッションの体験なしに「貧困を知る」ことを認めはしません。インターネットやテレビで流される映像に映る、飢餓や貧困に喘ぐ人々も、私たちと同じ時代に生きる人類共同体の一人です。彼らにも、私たちと同じ尊厳と可能性があるはずなのに、なぜ私はこうで、彼らはああなのか、そう自問させるコンパッションから次の行動への一歩が生じます。

幸い、上智大学にはそのような体験ツアーなどが豊富にあります。例えば、昨年からはカンボジア・エクスポージャー・ツアーが開始しています。未だに戦争の傷跡に苦しむカンボジアの現実を体験し、同時代の人間として何ができるのかを共に考える企画だ、と聞いています。他にも、大学レベルや学部学科レベル、サークルや先生方の企画になる体験ツアーが数多くあるでしょう。是非とも、世界の現実を知り、体験する機会を探してください。

そして、その現実を知り、体験した後は、それを徹底的に分析し、深く省察してください。そのためにこそ、学問があり、研究があるのです。貧困の原因は何なのか、貧困をなくすためにどういうプランが必要なのか、分析し、研究してください。そのためなら、大学はあらゆる教育上の援助を惜しまないでしょう。でも、それはすべて「他者のため」です。自分の名誉や成功のためではありません。上智大学をはじめとするイエズス会大学の卒業生は「他者に奉仕することによって、自己実現を目指す」人々です。ですから、上智大学で行われる学究活動は、すべて、人類共同体や地球への奉仕に直結しています。上智の理工学部では、人類の幸福に寄与する科学技術が研究され、上智の法学部では、人間の尊厳を守る法律学が学ばれるでしょう。上智の経済学部では、すべての

人がその実りを享受できる経済活動が模索され、上智の文学部では、人間の尊厳とは何かが思索されていくことでしょう。大学は、まさに、個人としても共同体としても、自分たちが体験した経験を分析し、深め、研究していく場です。そして、そこで営まれるあらゆる活動は「他者への奉仕」へと向かいます。

そして、卒業したら、上智大学で学んだことを実践してください。それぞれの場で、それぞれのやり方で、よりよい社会や共同体の構築のために、一人ひとりが出来ることを、力を尽くして実践してください。「すべての人の尊厳と権利が守られ、生きる喜びに溢れる社会を作り上げる」ために、学んだすべてを駆使して、奉仕してください。たとえ、社会的な成功を収めず、有名にならずとも、上智の卒業生にふさわしく、人間として正しい道を歩んでください。そういう卒業生たちこそ、私たちの誇りです。

今日は、懐かしい上智大学で、学生の皆さんに、お話しする機会に恵まれたことを心から喜んでいます。どうぞ、上智大学での学生生活を有意義に過ごし、イエズス会大学である上智大学の卒業生として、喜びと誇りを持って、人生を歩んでいってください。

ご静聴、ありがとうございます。

以上